

特258

997

川北朝鄰小傳

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



特258
997



川

北

朝

鄰

小

傳





日七十月二

子辰

午辰

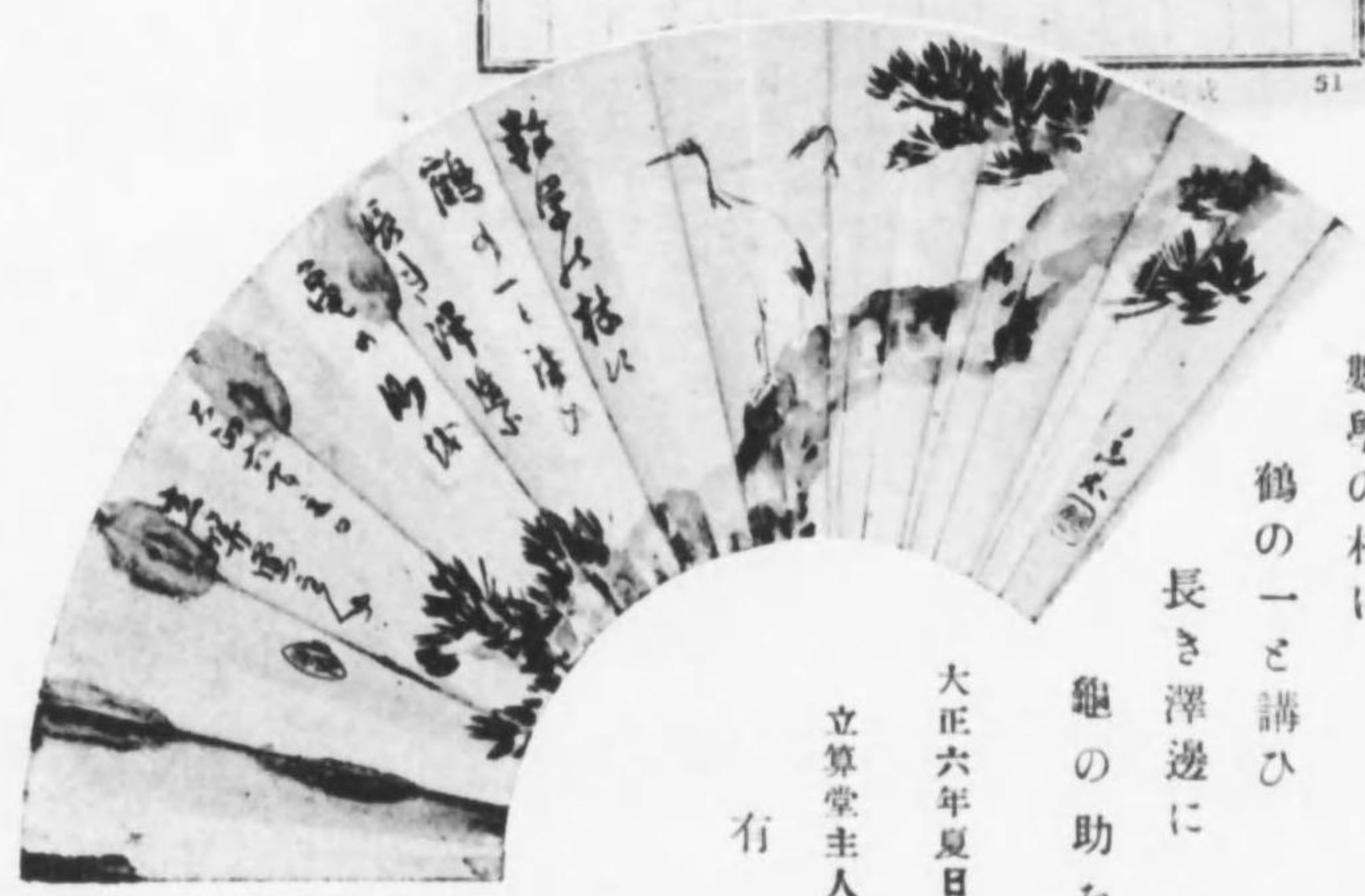
神

立算堂主人

(辞世)

雪解けて無界になるや神佛

有頂



數學の林に

鶴の一と講ひ

長き澤邊に

龜の助を

大正六年夏日

立算堂主人

有頂

川北朝鄰小傳

帝國學士院 三 上 義 夫

川北氏の祖先は元伊勢の人で安濃郡五日市に住し伊勢三郎義盛の後胤とも云ひ（安政五年八月改の先祖書）又伊勢國主北畠氏の出とも云ふ（立享歳壽記草稿）。さうして、始めに平氏を稱し後に藤原氏に改め（先祖書）北畠氏は藤原姓だとしてある。（歳壽記）

川北氏の祖先が伊勢から江戸に出たのは享保年間であつて、始めは商戸を開き諸家の用達をしてゐたが、朝鄰氏の祖父祥右衛門の時に至つて之を止め、旗本中根家に仕へることになつた。（歳壽記）此の祥右衛門は又名を孫兵衛及び十兵衛とも云ひ（先祖書）には孫兵衛と書いて其の横に他の二つの名が小さく誌されてゐる。祥右衛門より以前の事は此の外には何にも分らない。

祥右衛門は中根氏に仕へる前に武藤と云ふ家に勤めたことがある。それから中根氏の感應院と云ふ人（名は正昭、文政八年病死、年三十、中根氏系譜明細書）の代に勤仕することとなり、永壽齋

の代に再び武藤家へ歸り、後に主家を出て下總我孫子の娘の方に隱居し、嘉永七年甲寅九月四日、七十八で病歿した。(先祖書) 祥右衛門には二男三女があり、次男貢が朝鄰氏の父である。(同上) 長男喜太郎の事は明かでない。

次男貢は仙嘉及び新之助とも云ひ、諱を正信と云ふ。中根正寛の代に部屋住から御坊主に召し出され後に御組頭になるが、天保七年(一八三六)永の暇を賜り、同九年歸參、安政五年(一八五八)六月二十九日四十三歳にて歿し、牛込神樂坂善國寺に葬る。(先祖書) 貢には二男四女があり、朝鄰氏は其の惣領として生れた。弟と二妹は早く歿した。(先祖書)

中根氏の邸は市ヶ谷長延寺谷後(加賀町一丁目十六番地)に在り、貢は其邸内に住して、朝鄰氏は天保十年庚子(一八四〇)五月十六日に生れた。幼名を宗太郎と云ふ。母は歌女で、相州高座郡下土棚村農田中市五郎の長女であつた。(歳壽記) 母は後に名を「いち」と改められたらしい。(明治元年一月改「戸籍表」)。明治九年十月十一日。六十二歳で去られた。(川北氏自筆履歴書)

川北氏の戸籍に據れば、朝鄰氏の出生は嘉永元戊申(一八四八)五月十六日とあり、朝鄰氏自身の記録中に同じ記載のものがあるが、朝鄰氏自筆の「閱歴書」に明治三年庚午四月満三十年と記るし氏の年の條中に

八月一日静岡學校へ入學、此時年二十二トセシ故、戸籍面年齢ヲ改正スルニ至レリと云ひ、又明治五年七月十五日の條には、

届出ノ年齢ヲ以テ戸籍面トシ學校ニテ取扱ハレ茲ニ年齢ノ代ルコト、ナレリと見える。故に戸籍面の年齢は正しからず、前記の天保十一年生れと云ふのが正しい。

朝鄰氏は二歳の時に痘瘡に罹つたが至つて輕症であつた。(歳壽記) 弘化二年(一八四五)乙巳二月三日、六歳、文泉堂神田慎左衛門に就て習字を習ふ。初め左利きであつたが、これから右手の使を用を練習させられることになつた。(歳壽記) 習三年正月、母と共に市ヶ谷長延寺谷町に別居し、二月母の里方相州田中氏に寓し、八月谷町に歸つた。(歳壽記)

嘉永四年(一八五二)十二歳、中根家に召し出されて、二兩人扶持を受け、(先祖書、閱歴書) 安政三年(一八五六)正月十一日、十七歳で元服し、彌十郎と改名して、(閱歴書) 此の日金四兩を給與されることになり、習四年正月五兩二人扶持給與、(先祖書、閱歴書) 同年七月十一日家名相續(明治三十五年川北不二雄身元明細書) 五年には父を失ひ、六年正月には六兩の給與とある。(先祖書追記)

安政五年(一八五八)十九歳(閱歴書)に

十一月神田泰雨二條公ニ仕フ。村瀬孝亭氏ト共ニ泰雨ニ隨テ江戸牛込ノ物産所ヲ開ク。依ツテ孝亭氏ノ門人ヲ余ニ讓ラル。

とあるが、神田泰雨とは六歳の時から習字を學んだ神田愼左衛門であらう。川北氏文久四年（一八六四）編「算法淺述」の自序に「書師神田泰雨子」と言つてゐる。然らば朝鄰氏は長年間泰雨に師事したと見える。初めて算道に志したのも同じく泰雨から手ほどきをされたらしい。

「算法淺述」の自序に言ふ。

余幼キ時算法默竄指南録ヲ見テ書師神田泰雨氏ニ問フテ曰、此ノ書ヤ何ノ益有ル事ヲ。師曰、算學ノ一編ニシテ此道ヲ志ニ有益尤多キ書ナリト。是於余算道ヲ志シ、又言テ曰、余幼タリト雖モ何ゾ天下ニ益アルコトヲ學バズ而止ンヤ、師余ニ算道ヲ教ヘ玉ヘト再三乞テ止サル故、師又是ヲ免シテ乗除加減ノ法ヲサトス。云々。

朝鄰氏は既に神田泰雨から算術の初歩を受け、尋で又村瀬孝亭に就て算學を學ぶことになつた。村瀬への入門は「算法淺述」の自序に據ると、

安政丙辰（一八五六）秋、村瀬孝亭子ヲ師トシテ九章ノ術ヨリ粗点竄ノ一奇ニ入ル。とあるが、「數理起源」卷二十、即ち「戊辰離解集」卷五の卷尾に附したる記述には、

安政丁巳（一八五七）ノ秋七月十三日孝亭村瀬氏ノ門ニ入ツテ、乗除加減起源ヨリ學バン事ヲ乞フ、子直チニ許容アツテ、是從師トシテ仕フ。正二十八歳ノ時ナリ。

と見える。一は安政三年、一は四年になつてゐるが、要するに安政三、四年頃の入門であつた。村瀬孝亭の人物に就ては、岡本則録氏の手記に、川北氏編述の「本邦數學家小傳」並に川北氏の直話を引用して「村瀬は幕臣にて納戸組御家人なり、牛込の組屋鋪（今の納戸町の邊）に住し、數學を御粥安本に學びて入室の人とす。通稱は久平後に彌八と改む。諱は孝養、孝亭は號なり」と見えてゐる。朝鄰氏は村瀬孝亭に就て、點竄の定則までも學んだが、會々父貢の病歿に會ひ家事には逐はれ、主家の爲にも、武藝などにも多忙の身となるに至つた。「數理起源」卷二十には語を續けて言ふ。

翌戊午（一八五八）ノ春三月點竄ノ定則ヲ學ブ。又一奇ノ學ニ入ル。此ノ年夏六月、余家大君遠行シテ、余是ヨリ家事ニ苦シム、亦主家武藝ノ世話厚ク晝ハ終日弓馬劔砲ノ技ニ寸暇ナク、夜ハ又家事ノ爲ニ終ル、只深夜微カナル燈火ニ机ヲ枕トスルノミ、積日点竄ノ奥旨ニ至ル。孝亭子ノ教育ノ淺カラザルト、余一心ノ致ス所ナリ、孝亭子余ガ學ノ日進ムヲ悦ビ御粥先生ニ介ス安政五年（一八五八）即ち父の歿した年の十一月には村瀬から門人を讓られたことは前にも「閱歷書」

から引用して述べたが、岡本氏が朝鄰氏の直話によりて手記されたものにも、

此ノ時村瀬ハ他國ニ移住セルヲ以テ、立亭氏日々通ヒテ其ノ子弟ヲ教導シタリ。

とある。立亭は朝鄰氏の號である。此の事は「算法淺述」の自序にも見え、前の引用文の後を承けて

然ルニ孝亭子勤仕ニ志ス事有テ教授ノ道ヲ止ム、依テ余ヲ御粥先生ニ介ス。

とある。斯くて朝鄰氏が師村瀬孝亭の紹介によりて、御粥安本に入門したことは疑ひないが、今述べたところによると「氏の入門は安政五年十一月頃の事と見えるけれども」實は安政五年ではなく

「數理起源」卷二十の卷尾の記述には、

萬延庚申（一八六〇）春二月朔日先生ニ見エ、而シテ是從又先生ニ仕フ。

と見える。朝鄰氏が御粥安本から親しく教授を受けられた事情は「算法淺述」の自序に

是自以來先生ノ門ニ入テ朝夕從事而算學ノ一端ヲ得ン。

とあり、又「數理起源」卷二十には、

入塾スル事三年、略數理ノ微妙ヲ知ル。

とあるが、既にして御粥師は他界するに至つた。同卷に言ふ、

文久壬戌（一八六二）春二月先生古哲ノ中ニ入ル、余暗夜ニ燈火ヲ失フニ似タリ。師無クンバ益

勉強セズンバ有ルベカラズト、切嗟攻磨又得ル處有ニ似タリ。

此の文を見ても朝鄰氏が御粥氏に對して師弟の情誼の纏綿たるもの有りしを知られる。

岡本氏の手記に見えたる「淺致算法」は文久三年（一八六三）の年紀ある刊本で、其の著者平野喜房は御粥安本の門人であり、御粥、平野兩氏共に尾州藩士である。此の書に「文久三年癸亥冬川北朝鄰」と署名した序文があるが、此の序文に

余師御粥先生考…去歲先生終命數…茲門人有平野喜房…著一書…余一閱…其術…

とある。御粥の歿して文久二年二月からまだ二年に満たぬ同二年冬に御粥の門人で而も御粥と同藩である平野喜房の著書に此序文を書いたのは、朝鄰氏が、眞に御粥の門人でなくては叶ぬことである。且つ此の序文の存在によつて同門平野氏から甚だ重視されてゐることも知られる。平野氏に至つて親しかつたことは、川北氏訂の「淺致算法余論」の引に川北氏が大村一秀の「淺致」の解を岩田好算から得たものに同書附録の術を難じたものあつたのを、川北氏は

依テ此事ヲ子泉ニ告グ、子泉再訂シテ本書ニ誤リナキコトヲ辨ジタ。

と云ふことが見え、又維新の際平野氏が尾州に引上げたのを送つて品川に到ると云ふ記事があるなど察することが出来る。子泉とは平野喜房の號である。

文久二年(一八六二)朝鄰氏年二十三、七月麻疹に冒されたが幾分ならずして癒へた。(閱歴書)
文久三年二十四歳、三月十九日江戸出發、京阪に旅行して七月二日に歸つた。將軍上洛の事があつて朝鄰氏も其の爲に上洛の機會を得たのであつた。(立亭旅行記事)氏は此の行に於て

京師ニ遊ビ諸家ヲ訪フト雖、通達ノ士ナシ、又浪華ニ至ル。金塘子ノ亭ヲ訪フ。子モ旅行シテ好ミヲ果サズ。秋七月江戸ニ歸リ又一際勉強ス。

と「數理起源」卷二十に言つてあるから、京阪地方で數學上多く得る所がなかつたらしい。「閱歴書」の此年の條には

七月十日、村瀬孝養氏二條殿下ニ仕官スルノ故ヲ以テ門人數名ヲ余ニ託ス。故ニ講學ノ舍ヲ市ケ谷長延寺谷ニ設立ス。孝養立算堂ト命名ス。

とあるから、朝鄰氏が立算堂の堂名は、村瀬の命じたのである。前に村瀬が勤仕するとあるに依つて御粥へ紹介したと云ふのは固より別の事件であらう。

文久四年二十五歳、内田五觀の内に入る。「數理起源」卷二十に、

同甲子(文久四年)春正月十六日觀齋内田先生ノ麻布龍土ナル草庵ヲ音信シテ先生ニ見エ、數論屢々先生余ヲ見ル事兒ノ如シ。於是先生ニ從テ亦圓理ノ一端ヲ學ブ。

とあり。又内田五觀稿、川北氏補訂の「圓理手引、求積解」の明治三年川北氏序文には

余五觀先生ノ門ニ從事シテ圓理ヲ學ビ諸積ヲ求ムルノ理ヲ講究ス。

と言つてある。觀齋は即ち内田五觀の號である。五觀は「文久四載歲在甲子春正月良辰」を以つて同時に見隠伏三題の免許を朝鄰氏に附與した(免狀に據る)。然らば五觀に入門後直ちに免許を與へたもので造詣の深さを認めたのであつた。さうして朝鄰氏が圓理を學んだのは内田の門に入つてからの事であつたらう。此の年朝鄰氏は内田師の懇懇により續神壁算法附録の解義を編せんことを思ひ立ち、先師御粥子の解草を集綴潤し且つ其の闕如せるものは自ら考解して、先きに白石長忠及御粥安本兩子の編修せる同書本編の解義と共に五卷となし、「續神壁算法解義」と題して、秋九月内田師の覽に呈した。(岡本氏手記及び續神壁算法解義)朝鄰氏二十六歳より、二十八歳までの三年間の事は甚だ明かでない。「閱歴書」にも應應四年(一八六八)以後の事は可なりに書いてあるが其以前の事は頗る省略せられ、特に此三年間の事は知ることが出来ない。唯、「立亭旅行記事」に依つて慶應元年(一八六五)五月より翌年九月まで大阪に居たことが知られるが宿泊の場所などが明記してあるだけで、其の他の事は記してない。唯、在勤の余暇に大阪の郊外を隈なく遊歩したことが見える。此の間に若干の著述はあつた。然るに「數理起源」卷二十には此の間の事も記されてゐ

る。朝鄰氏は前述の内田から圓理の一端を學ぶと言つた後を承けて、「先生宗統ノ印可ヲ余ニ賜フ」と言つてゐられるが、これは「慶應四年歲次戊辰秋八月殺且」に別傳免許を與へられたことを言ふのである。(免狀に據る)

慶應元年に大阪に行つたのは、主家に従つて幕府征長の軍に在つたのである。(算法開方通理の理軒福田泉の題子に據る)

大阪滞在中に「算方開方通理」の作があり、大阪では福田理軒と交りて、理軒は氏の書の爲に序文を贈り(同書の題にある)又理軒から歴史を得たりなどした。(數理起源卷二十)。慶應二年九月大阪から江戸に歸つたが、それから後の著述に就て「數理起源」卷二十に次の如く言ふ。

又夫より前、岩田好算子、大村一秀子、萩原湖山子皆我が友タリ。彼是ノ名算家ニヨツテ得ル書數編又考訂ノ艸稿文庫中ニ滿ツ、依ツテ去年ノ春潤色して「丁卯雜解集」ト號ス。丁卯申十五卷ノ書成ル。今戊辰ノ年モ夫ニ次デ稿ヲ集ム。豈計ランヤ、東國ノ變、余居テ安ンズル能ハズ、夏四月、兩總ニ到リ、又秋八月駿州ニ赴ク。九月江戸ニ來リ、又兩總ニ到ル、稿ノ編スルノ間ナク漸ク旅中ニ於テ集ムル處合シテ五卷トナル。今東京ニ旅寢シテ正ニ算ヲ納ム。

「數理起源」卷十七、即ち「戊辰雜解集」卷二は兩總にありて兵火砲聲を聞きつゝ、極めて不安の

間にも「片時モ此ノ業ヲ忘レズ、前ニ次デ此ノ卷ヲ編ス」ることを得たのであつた。(同書に據る)「閱歴書」の慶應四年の條には言ふ。

一月初メヨリ江戸穩カナラズ、終ニ四月十日某隊ニ隨從シテ下總行徳ニ至ル。市川、八幡、船橋ノ間ニ居ル。此ノ間海岸ヨリ官軍ノ攻撃ニ逢フ、砲彈ノ下ニ戰シテ居ルコト三日、同月十三日探偵ノ爲江戸ニ歸リ……十五日……兩總ニ至リ二十二日江戸ニ歸ル。

四月十一日は江戸城が官軍の手に歸し、五月十日は上野の戦争であるが、此の頃の朝鄰氏の動靜は「閱歴書」から窺はれる。

時勢ニ隨ヒ士道ハ觀念シ終ニ脱走セシモ考フル所アリ、之ヲ止メテ中根氏を助ケテ駿河ニ行クコト、シ、先ニ發シテ準備シ、又中根氏舊采地ノ不納處分ヲ談判シ江戸奮邸ノ始末ヲナス。

朝鄰氏は維新の際に主家に従ひて静岡に來り、主家の爲に屢々東京に往來などしたが、明治二年四月五日には公議所へ「驛に學校御取建可然建言」を建白した。其の建白書は「立亭旅行記事」第九編及び「閱歴書」の明治二年の條に錄せられてゐる。之に據れば、驛毎に一ヶの學校を建て、其の驛及び近郷の童蒙に筆算書讀を修めさせ、人材引立の便宜となして、就學者は七歳より十五歳までを限ることとし、

以テ市民家業ヲ忘レザルヲ第一トス。十二歳ヨリハ半日學校ニ修業シ、半日家事ヲ事トス。さうして其の人才あるものは登用することとし、修業人は貧富の別なく修業を第一となすべしと云ふのであつた。

朝鄰氏は駿河に居た頃に、算額を奉納したことがある。其額題は解義と共に氏の著述「立算堂掲額駿河編」の中に見える。此稿本は固より完本ではなく、纏まつてはゐないが、此の書名から察しても尙他に奉額されたことがあるのではないかとも思はれる。書中の記す所の第一額は明治二年春二月駿河府中（静岡）淺間社に奉納したもので、元治元年（一八六四）三月十二日考之としてある。第二額は明治二年八月十五日静岡宮ヶ崎報土寺八幡祠への奉納で、解義亦同日考成とある。第三額は同年秋九月に川北氏門人佐野金治郎算克撰として駿州清水港箕輪稻荷社へ奉納し、三題から成つてゐるが、其解義の終りには

明治二年九月十七日於駿河國静岡宮ヶ崎街報土利場仮立算堂書之。關自由亭先生八代川北藤原朝鄰誌。

と署し、額の前には川北鑒定、佐野撰額と記す。佐野は清水港の人で當時静岡賤織（機）の誤りか）山麓に居たのである。其三問中の第三問の解は川北氏編「圓理稱平術拾遺」の終りにも録せられ「萬延

二辛酉（一八六一）二月廿七日寫之、附曰、此解尾府芳山小川先生ノ方ヨリ頂苗軒先生に送リタル解也。立亭川北有頂氏訂」とあるから川北氏自身の解ではないと見える。然らば其の術が門人佐野氏の術でない事も言ふまでもない。

算額に就て序でに言ふが、川北氏著述に「國府算額詳解」がある。慶應元年歲次乙丑夏五月穀旦に武州小金井の鴨下黃水門人が府中六所明神に奉掲した算額の問題中の大半を解いたものであるが實は鴨下門下の手に成つたと云ふよりも其の大部分は川北氏の作かと思はれる。此の算額には四十七題を記し、一題毎に別人の名前になつたもので、川北氏の序文が附いてゐる。（國府算額に據る）然るに川北氏の「國府算額詳解」には慶應元年乙丑五月十一日の序文がある。

武州小金井ノ算學者鴨下黃水今春彌生ノ初メ余ガ立算堂ヲ訪ヒ、國府六所明神ノ社前ニ額ヲ獻ジテ以テ益々數道ヲ盛ナラシメンコトヲ禱ルト計ル。亦觀齋先生ノ命アリ、依テ余點竄スルコト日ナラズ、左件三十一條ノ解ヲナス、題ハ新ニ考フル所ニシテ、未ダ他ニ見ルコトナシ。依テ淺間ト雖モ其術文ヲ全備シテ圓理題ヲ加エ以テ四十七題ヲ一額トス。又圓理題ニ於ケル同門法道寺美ノ考フル所ニシテ、皆先生ノ訂正ヲ乞フ、其ノ計ルコト速ニシテ初夏中旬ニ至リ額面整フ、余ニ又序ヲ乞フ、依テ之ヲ附ス。五月三日神前ニ奉ル、黃水ノ此ノ道ニ力ヲ盡ス又門弟

子ノ心一ナルコト正ニ神慮ニ叶フト云フベシ、余解義書ニ及ビ暇日ナク、故ニ其ノ失アラシク
トヲ恐ルト雖モ、只求メニ應ズルノミ、更ニ他人ノ見ヲ不許云々。

此序文に據れば、四十七題中の圓理題は「法道寺ノ考フル所」とあり、第四十四問以下の四題が恰も圓理術に關するもので、蓋し法道寺の作であらう。法道寺は此種の算法に達してゐた。さうして「左件三十一條ノ解」と云ふのは朝鄰氏は單に其の解を試みたと云ふのか、それとも問題も自ら作つたものであるか、前述の序文だけでは不明であるが、朝鄰氏の著述「算法淺述」は右言ふ所の三十一條條は大概記載せられ、中には多少題意を改めたものなどもある。「算法淺述」は文久四年甲子正月の序文を有し、鴨下黃水の奉額前一年有余の作である。且つ其序に依れば、御粥先生の存中に淺問數條を撰み先生に一閱を賜はんと欲せしも果さずして先生歿し、其の後右の淺問數條の中聊か可なるもの五十有餘條を集めて「算法淺述」と名付けたと云ふ如き意味が述べられてゐる。然らば此の諸問題は鴨下の作つたものではなく、朝鄰氏が供給せられたものと見て大過なかるべしと思はる。

朝鄰氏は明治三年には八月一日に静岡學校へ入學し、十一月十七日には静岡藩學校で學術修業人世話心得取締を申付けられ、此の年は荻原家相續について大に勞する所あつて、其の爲半年間苦辛

したけれど研究は怠らなかつたと自ら話されてゐる。朝鄰氏は藩學校で洋算を學ばれたのであるが明治三年には既に「筆算題叢」の艸稿に着手し翌四年八月十日には静岡縣小學所教授方を命ぜられて算術を教授し又「代數學教科書」を編纂した。傳習所に於て外國教師の宥克立及び化學等の講義を聽聞することとした。さうして和算と洋算との對照など試みた。明治五年五月には「洋算發微」二卷を出版した。此月十五日通稱彌十郎を改めて朝鄰となる。九月二十八日静岡傳習所教授手傳となり十月より生徒に代數學を教授した。十二月から傳習所は私學校となり六年二月に廢せられた。此の頃の朝鄰氏は用宗村等の量丈をした。又「幾何學原礎」を作る。斯くして洋算の著述も追々に試みられた。此年即ち明治六年八月には陸軍兵學寮に奉職することとなりて出京した。此時戸山學校創立の際であつたが、其準備に與り、後に數學教官になつた。明治七年四月には士官學校の數學教官となる。後に又戸山學校附になつたりして、兩校で算術、代數、幾何等を教へた。明治十年西南戰爭の際には新撰旅團の會計官として出征し、戦地に在つて糧食の事を司り翌十一年二月からは再び戸山學校で教授し、又士官學校でも教授したらしい。(閱歷書)

斯く維新後には静岡に於て又東京に於て洋算の教授に従事したので、和算の研究は自ら影響を受けることゝなつた。「數理起源」卷四十一には辛未(明治四年)の日附で

余去冬静岡學校ニ助教ノ命ヲ奉ズ。依テ洋算ニ從事シ暫ク點竄ヲ廢ス。と言ひ、同書卷五十六の端書きには、

辛未（明治四年）静岡學校ニ於テ數學教授ノ命ヲ奉ジ、良洋法ヲ主トシ、暫時点竄傍書ヲ廢ス
………癸酉（明治六年）八月陸軍兵學寮ニ出仕シ………今ヤ責ヲ數學教官ニ存シ、陸軍士官ノ生徒ヲ教授ス。余暇ヲ以テ洋法高次代數ニ勉強ス。

と云ふ風であつて、和算の方は自づと等閑になり勝であつたやうであるが、而も「數理起源」の編纂は年々怠ることなく、明治十三年に至りて百五卷の多きに達した。（同書に據る）

朝鄰氏の「數理起源」が明治十三年を以つて筆を絶たれ、其後續稿の作られなかつたのは、此の頃から西洋の高等數學書出版の事業を企て、之が爲に奔走に餘裕のなかつたからである。而も其多忙なる中でも和算に關する事項は時をり記述されたものが見える。

明治十年の時には數學會社が創立せられ、朝鄰氏は其第二回目から出席した。其雜誌の編輯にも力を盡し、又開數社發行の「算學新誌」にも助力した。これは明治十一年からの事であるが、明治十二年には數學會社の擴張に於て神田孝平、柳猶悅の兩氏を補助した。（閱歷書）。朝鄰氏が數學會社の爲に盡力されたことは「數理書院月報」にも諸所に見える。「數學會社雜誌」を見ても其の事

情は知られる。

高等數學書出版の計畫は明治十三年に始まる。此の年十二月には數理書共同出版規則約定法を定め之を廣告した。（閱歷書）

明治十四年一月の「數學會社雜誌」に、

今般余輩數理擴張ノ爲メ有志ヲ募リ算書共同出版ノ業ヲ起ス。其方法ハ東京上野西黒門町二十番地上野塾へ尋問次第報道スベシ。但シ現今突氏（トドハンター）軸式圓錐曲線法着手。十四年一月。川北朝鄰、上野清。

とあるのは、即ち之に關するものであつて、其共同出版とは上野清との共同の事業であつた。同趣意の廣告は十四年二月の雜誌にも見え、

己ニ其第一回印刷成リ株主諸君ニ頒テリ。然ルニ株主未滿ニ付尙江湖有志者ニ告グ。と述べられてゐる。

朝鄰氏が外國語に通ぜずして能く高等數學書出版の事業を起されたのは上野清の共同に待つものであつたのは言ふまでもないが、朝鄰氏の學界に擁せる勢力に依つて此の事業の敢行され得たことも亦問ふを須でぬ。此事業に就て明治十三年十二月二十一日出版の「數理叢談」第四十號に次の雜

報がある。

是迄我邦には完全の數學書乏しく、且舶載洋書の高價なるに依りて大に斯學の進歩を妨げしが、今度川北朝鄰氏發起にて數理書共同出版の規則を造り、原書の價の約三分一にて株主を募り、必要の洋書を譯出刊行し、我邦の數學書を完全ならしめんと、本月より規則書を全國に公布せらる。又其着手の初めは來る十四年一月より「トドハンター」氏軸式圓錐曲線法にて校正は同氏、翻譯は上野清氏なり。右は餘程の大業なれども川北氏は平生より數學擴張に志を委ねられし人にして、且斯學界の聲望家、諸氏も此舉を深く賛成せらるゝ由なれば必ず成功し、數年の後には我邦の數學書の完備を見るに至らん。

斯くして上野清との共同として此事業は始められたが、「軸式圓錐曲線法」の一部が出版された後は、長澤龜之助氏が反譯を擔當することゝなつた。「閱歷書」に明治十三年の條で「十一月二十七日ヨリ長澤龜之助寄宿ス」とあるから、長澤氏との關係は此頃からの事であつたらう。長澤氏は三年有餘の間に九部の書を翻譯したが、其後、故ありて市東佐四郎、向井嘉一郎の兩氏が反譯の任に當るに至つた。(長澤氏談)

而て朝鄰氏の此舉に向つて最大の貢獻をなしたものは實に長澤氏に外ならぬ。明治十五年に至り

數理書院を設けて共同出版の廣告を試み(閱歷書)。此の年六月には「書院月報第一號」を公にし出版の數理書購讀に加盟せるものには無代配付されることになつた。(同月報第一號)。此頃には其出版も段々進んでゐる。「月報第一號」の緒言には

余輩曩キニ數理書院設立ノコトヲ四方ニ廣告セシニ今ヤ同志略々相集リ、漸ク出版ノ舉ヲ實施スルヲ得ルニ至レリ。此ニ於テ先ヅ豫メ其目的ノ概要、履行ノ順序ヲ述べ、併テ本紙ヲ發行スルノ緣由ヲ陳セントス。

と述べ、第一には「泰西數理書ノ反譯、印行ニ從事シ、數年ヲ經テ其完成ヲ期シ、一第二には「内外古今ノ數理書ヲ蒐集シテ一書庫ヲ立」てんことを目的として、同志を募りて毎月數學書の印行配布を企てる旨が記されてゐる。さうして十五年六月、川北朝鄰、長澤龜之助兩氏の名を署してある。

緒言の次に「加盟之規約」があるが、毎月六十四枚以上八十枚以下を限り、月額三十錢にて出版配布をしたのである。初め六百口を募集したが今二百三十口の豫約を得て、兎も角印刷に着手する旨が見える。第五號には加盟者二百八十二人三百二十口、十六年六月には三百六十二名三百九十六口になつた旨が記してある。當時の數學書豫約出版の趨勢は之に依つて察せられる。此出版事業に就ては、

院主川北朝鄰出版ニ係ル事務一切ヲ負擔シ長澤龜之助反譯並ニ學事ニ係ル一切ノコトヲ負擔ス
(月報第二號)

るものであつた。(此時出版の諸書は凡て川北朝鄰閣とし、次の如きものがあつた。)

- 1 軸式圓錐曲線法。英國突氏著。上野清譯述の。明治十四年七月出版
- 2 微分學。突氏著。長澤譯述。明治十四年十一月出版
- 3 微分學例題解式。長澤著述。明治十七年六月出版
- 4 積分學。笑氏著。長澤譯述。明治十五年四月出版
- 5 幾何圓錐曲線法。英國獨來氏著。長澤譯述。明治十五年八月出版
- 6 代數學。突氏著。長澤譯述。明治十六年一月出版
- 7 同例題解式。突氏著。市郷弘義譯。明治十八年五月出版
- 8 平面三角法。突氏著。長澤譯述。明治十六年六月出版
- 9 同解式。同上。明治十八年出版
- 10 球面三角法。突氏著。長澤譯述。明治十六年八月出版
- 11 同上解式。市東佐四郎著述。明治十八年出版

- 12 彈道數理。長澤抄譯。明治十六年十月出版
 - 13 宥克立。突氏著。長澤譯述。明治十七年一月出版
 - 14 同例題解式。同上。同 年十月出版
 - 15 論理方程式。突氏著。長澤譯述。明治十七年七月出版
 - 16 微分方程式。英國伯爾爾氏著。長澤譯述。明治十八年一月出版
- 數理書院出版の諸書は長澤氏が主とし反譯の任に當り、朝鄰氏は其原稿を整理し、校閲して出版の事を主宰するのであつた。長澤氏は更に「積分學解式」及びテートの「動力學」等を譯述する豫定であつたが、實現にならなかつた。(長澤氏談)。此前後に於て朝鄰氏は明治十五年二月五日には算堂塾立を富士見町に設立し、長澤氏が教授を擔任した。(閱歷書)。長澤氏教授の事に就ては「數理書院月報」第四號に

今回時間ヲ定メ規則ヲ設ケ本院ニ於テ刊行スル諸書ヲ講ジ且ツ質問ヲ受ク。依テ有志諸君ニ廣告ス。 十五年九月 長澤龜之助

とあるが、後には書面での質問及び他書に就ての質問にも應答されるやうになつた。

明治十五年三月二十九日に内田五觀が病歿した。(川北朝鄰日記) 歿するに先だち、朝鄰氏に印

可状を與へる筈であつたが、病軀の爲め免狀の淨書に堪へずして遂に事實にならなかつた。五觀氏既に歿して後、(五月十六日)其未亡人は翁の遺命により代に印可免許狀本文の一軸を交附された。

朝鄰氏は明治十九年三月四日に陸軍の學校で非職を命ぜられ(辞令控)、閑地に就いたので、これから幾回か各地の巡遊を企て、二十年十一月静岡に歸住することになつた。(旅行紀事第三十九編より四十五編まで)。二十一年六月には静岡の師範學校で算術、幾何學の講義を囑託され、又静岡教育會の事務を擔當することゝなつた。(閱歴書)。朝鄰氏は二十年三月に數學協會の創立を發起し、眞野肇と二人で幹事となつた。(上野清氏手記)。静岡に於て此協會の雜誌の編輯にも從事された。(閱歴書)。蓋し當時の編輯委員は上野清であつた。(上野氏手記)。明治二十二年には師範學校を止めて中學校の教員となり、二十四年まで在職した。(閱歴書)。

明治二十四年五月朝鄰氏は静岡を引拂ひて全家大阪に移り、塾を立て、數學の教授を試みることになつた。(閱歴書)。蓋し大阪には朝鄰氏が最も愛護し、一時女婿にもしやうとした秋山保がゐるので、其關係から大阪に移轉の事になつたらしい。秋山は朝鄰氏の母の郷里相州土棚村の隣村深谷村の人で、明治二十年初めて兵庫師範學校へ奉職した際には朝鄰氏は特に之を送りて神戸に行き、(旅行紀事第四十一號)。二十一年にも神戸に行つて之を迎へ(同五十編)。二十三年四月には大阪

への轉任を送つて行つた(同五十八編)こともあつた。又朝鄰氏は二十三年の暮から大阪へ行つて年を迎へられてゐる。(同六十二編)

朝鄰氏は既に大阪に引移り、明治二十四年五月三十日には立算堂塾開業願を大阪府廳へ出したが許可にならなかつたので計畫は行はれなかつた。(閱歴書)。けれども其の當時の塾則の一枚摺を見るに次の如きものであつた。

立算堂塾ハ數學専門學舎ニシテ文久二年江戸市ヶ谷ニ開塾セシヲ始メトス。其後明治三年駿河静岡ニ於テ開塾シ、明治十三年東京麴町區富士見町二丁目ニ開塾セシモ、當時塾主ハ數理書院ノ業ニ係リ事多端ナル故二年ヲ經テ閉塾ス。今回塾主ガ當大阪府ニ來リ數年間實驗ニ由リタル普通及ビ中等ノ教育法ニ據リテ懇切ニ授業センコトヲ明言シ當市西區江戸堀南通リ三丁目百八十番屋敷ニ開業セリ。西洋數學ノ如キハ大ニ面目ヲ新ニシ難易其中庸ヲ取テ實學ヲ基トス。本邦數學ハ塾主ガ得意トスル故學者ノ習得シ得ベキヤ論ヲ俟タザルベシ。

要スルニ本塾ノ目的ハ洋法ニ於テハ實業教育ノ法ヲ主トシ、私法ニ於テハ先哲ノ遺法ヲ知ラシメ本邦獨立ノ數學ヲ擴張セント欲スルニ在ルノミ、乞フ數學ニ志アル諸氏來ツテ其實ヲ知ラレヨ。

明治二十四年六月

塾主 川北朝鄰

此塾則に附したる假規則の和算の部に於ては初學科は珠算の運用と演段の大意、考究科は本朝數學の沿革及歴史、天元統術、圓理算術であつて「右本邦ノ法圓流宗統ノ學ヲ傳フ」としてある。本朝數學科の授業時間は午前七時から九時までとした。之れに依りて朝鄰氏は洋法數學の外に和算をも傳授する意のあつたことを知る。けれども大阪の岡島伊八氏等が當時の事情を語られる所に據ると餘り人氣なく、學修希望者も多くなかつたと云ふ。而も朝鄰氏は大阪に於て少くも一人の高弟澤池安兵衛氏を得た。澤池氏は後に別傳を授けられ、其著述類を見ても造詣の淺からざるものがある氏は不幸にして産を失ひ大病で明を失ひ今は天王寺の近傍にわびしい生活してゐる。

朝鄰氏が大阪に居たのは一ヶ月半に過ぎない。静岡を立つたのが五月一日で（旅行紀事第六十六編）六月七日には在京の岩永義晴から出京就職の事を勧められ、朝鄰氏は「大阪ニ來リ一私塾ヲ設ケ在阪ノ同學者ト結び教育上ニ盡力センコトヲ意トシ、傍ヲ數學、歴史編纂ノ料ヲ蒐ムルヲ勤メントセリ、故ニ本意ヲ告ゲ猶ホ機會アラバ出京セン」と返信したが、友人中野義房からも督促され、「開業ノ期ニ至リ之ヲ止ル」のも不本意ではあつたけれども月の十八日遂に上京することとなり（同第六十七編）參謀本部の陸地測量部に奉職するに至つた。是から又數學協會等の事にも盡力した。（閱歷書）。朝鄰氏は上京後暫く單身で飯田町の中野氏に寓し、家族は大阪に残つてゐたが、二十五

年一月には妻子は大阪から静岡に歸り（旅行紀事第六十九編）二三年の後に始めて出京の事になつたらしい。朝鄰氏は陸地測量部奉職後連年各地に出張して測量の事に従事した。（閱歷書）旅行の餘暇には和算家の跡を訪ひ調査したこともあつた。

明治三十年三月十日所藏の和算書全部を理科大學へ納めた。（閱歷書）當時理科大學では菊池大麓博士の下に遠藤利貞氏が主になつて和算書の蒐集に力めてゐたが、川北氏舊藏本は其の蒐集中の主要な一部分になつた。

是より先き、明治二十四年には藏書を謄寫して差し出したこともあつた。（閱歷書、旅行紀事第六十四編）。

朝鄰氏は明治二十九年の頃から三角測量作業誌の編纂に従事し（閱歷書二十九年度の條）、三十五年からは測量部の人達が組織した三五會の爲に盡力し（同上三十五年の條以下）同年數學地理學會にて關先生二百年祭記念の爲に遺著出版の調査委員となり、三十七年四月十二日正八位に叙し、同年十二月二十七日勳八等を授けられた。（閱歷書）。明治三十九年三月二十四日、三五會の總會から歸宅の際誤つて江戸川に陥り奇禍に會つたが人に助けられて蘇生した。（同上）。朝鄰氏は平生甚だ健康で此の時の外には殆ど醫者の世話になつたことはないと云ふ。（朝鄰氏直話）。同年五月に「三五會

報」第一號が成り爾來其編輯に盡力した。(閱歴書)。明治四十年四月六日數學物理學會總會の際に關先生二百年祭を行ひ、朝鄰氏は其式辞と關氏事蹟とを演述した。(閱歴書)

明治四十一年六十九歳、十一月二十七日に退官願ひを出して十二月十六日に依願免官となつた。

同月三十一日修技所清國學生教授を囑託され、四十三年三月三十一日に至つた。在職中に修技所沿革取調をも囑託される。(閱歴書)。朝鄰氏は兼て三角測量の沿革を調査編纂してゐたが、其草稿を舉げて退官の際に測量部へ寄贈したので、明治四十二年に次の如き賞状を授けられた。

在角中三角測量ノ沿革ヲ調査シ永ク其事蹟ヲ傳ヘント欲シ公務ノ餘暇ヲ以テ其編纂ニ着手シ爾來年ヲ閱スルコト十五年、日夜刻若精勵遂ニ四十八冊ノ多キニ上レリ。尤ヨリ之ヲ以テ詳悉セラルニ非ザルモ、先輩苦心ノ跡ヲ知ラシメ後進者ヲ利スルコト尠カラズ。今退官ニ際シ悉ク之ヲ當部ニ寄贈ス。誠ニ奇特トス依テ茲ニ之ヲ賞ス。

朝鄰氏は明治四十三年四月二十四日東京を引拂つて駿州鈴川へ引退し老を養ふ事になつた。(閱歴書)。蓋し駿河は第二の故郷であり、又鈴川は夫人かね子の郷里に近く、且つ此の地方に静岡の舊門人たる兩鈴木氏が厚く舊師を遇したことなどが朝鄰氏をして鈴川に引退せしめた原因であつたらう。是より後は諸種の解義類を整理淨寫して諸友の間に頒つた。壯年時代の編纂に係れる「數

理起源」の如き百餘冊もある大部のものでも二三部も淨寫されたと云ふ。「閱歴書」には當時淨書頒布された書名月日等も一々記載されてゐる。

大正六年には林鶴一、長澤龜之助兩氏に印可免許狀を夫々授與され、是れで漸く後繼者を得られたと安心せられた様であつた。

朝鄰氏は此の年の暮に上京の際風邪に罹り長く困られてゐたが、私が翌七年二月旅行の途次鈴川の寓居を訪ふたときは始めて外出が出来るやうになつた許りだと云ふことであつた。其後回復して尙一二回は上京されたが、此頃から健康は可なり害されてゐたやうであつた。晩年まで眼も耳も健かであつたが、此頃には夜分の書見など稍々困難を感じられ、晩年には足を害して歩行はやゝ困難であつたと云ふけれども此年秋の頃まではまだ書寫などに従事されてゐたが十二月には大分健康が悪かつたらしい。八年一月元旦には諸子を膝下に集めて訓戒を垂れ、終日俳諧等に時を過したが翌日からは臥床して、別に病症と云ふではないが全く老衰の爲であつたらしい。(川北不二雄氏談)二月十七日に至りて翁は自ら筆を執り、

辞世 雪解けて無界になるや神佛 有頂

と記した(日記同日の條)。翁は固より俳句に長じてゐる。翁が鈴川に隱棲して富士の秀麗を偲

んだ感情も其時々俳句に現はれてゐる。其二、三を記るせば、

富士もまた初夏の景色を保ちけり
不二白し寒さ身にしむ明の朝
初雪は富嶽に時氣を示しけり
開く山雪踏分けて登る人
秋半ば富士の高根は眞白かな

平生俳句を好んだ翁は既に辞世を俳句に託して、大正八年二月二十二日と云ふに眠るが如くに鈴川の寓居に歿せられた。其二十五日池上本門寺内の善國寺墓地に葬る。朝鄰氏の先考貢の墓は初め牛込神樂坂の日蓮宗善國寺にあつたが（先祖書）其墓地は明治四十一年本門寺内に移され、同年七月十日其改葬供養の爲めに朝鄰氏も列席されてゐる。（閱歴書）是に於て朝鄰氏歿するに及び亦本門寺内に葬つたのである。法名を

雪相院 立算日朝居士 と云ふ。

朝鄰氏が俳句を好んだのは蓋し年少時代からの事であつた。「數理起源」卷三十七の端書きに馬場錦江の事を述べ「余俳諧ヲ先生ニ學ブ」と記されてゐる。錦江の父貢湖も亦之を善くし、同書卷

三十一の端書には「貢湖先生俳諧ヲ善クシ玉フ、八世其日庵秦々ト號ス」と見え、「立亭旅行紀事」第三十四編には日光清瀧に天保丁酉の年に建てられた秦々の俳諧の碑があると云ふ。貢湖、錦江は固より其道の大家であつた。さうして朝鄰氏は錦江の高足であり、其歿後は門弟の教授に當る筈であつたが之を厭ひて敢て當らなかつたと云ふことである。（岡本則録氏談）馬場氏父子は共に知名の數學者であるけれども、朝鄰氏は錦江から數學を學んだ形跡は傳はらぬ。錦江の歿したのは萬延元年（一八六〇）七月二十七日にして朝鄰氏二十一歳の時であるから、少壯の頃から此道に深かつたことが知られる。試みに壯時の吟詠を挙げると、文久三年（一八六三）六月上方から歸東の途次に

汗になりて咄すも翁に手向かな 粟津の義仲寺にて
涼しさや熱田の宮の前なれど 熱田にて
見渡しや山を扶みて霧の海 掛川にて
朝涼や不二を見越して大井川 大井川にて

の如きものがあつた。（旅行紀事第二編）「旅行紀事」中には壯時の俳句がまだ幾らも記されてゐる。大正六年夏林鶴一、長澤龜之助兩氏に免許狀を授與された折讀める

數學の林に鶴の一講ひ長き澤邊に龜の助を

立算堂主人有頂

今朝鄰氏の傳記は一通り書き終つたので家族の事に就て少し記すことにする。朝鄰氏は文久三年二十四歳、八月十一日相州下土棚村農小菅市兵衛次女邦子と結婚した。(閱歴書) 又お國と書いたところもある。下土棚村は母の郷里である。慶應元年には江戸市ヶ谷の邸にて長男武太郎が生まれた後に武と改める。(戸籍表)。然るに最初の結婚は幸福なものでなかつた。(戸籍表)。には長男武二歳の時離ると朝鄰氏は記してゐるが「旅行紀事」で見るともう少し後の事らしい。慶應四年四月維新の變亂に際して朝鄰氏は中根家の家族を迎へんが爲に北總に行つたとき、朝鄰氏の老母と妻と妹と長男が中根氏の采地に居たとか言つてある。(第五編)。同年七月には母と妹及び長男を母の里に預け、八月單身静岡へ行く、(第五編附録及第六編)。此年邦子夫人は奥州二本松等に到り、此後も朝鄰氏に文通をしてゐたが(第八編、十一編等)。同棲した様子は無い。さうして朝鄰氏は明治四年には静岡にあつて駿州用宗村の士族大高昇平妹米子と結婚した。(閱歴書、戸籍表)。實は静岡の藥種商田村小兵衛の長女である。(戸籍表等)。朝鄰氏は再婚後三十日間の賜暇を得て相州及び東京に旅行し、母と長男を伴ひ歸る。(閱歴書、旅行紀事第二十一編)。十二月長女嫺子生る。(戸籍表) 明治七年次男文出產、翌年夭折、(同上) 十年三月次女治子出生、十二年十一月三女明子出生、十九年四月四女咲子出生、二十二年八月三男不二雄出生(閱歴書)。明治二十一年長男武結婚。同

年男子出生(同上)。明治三十年測量に出張中夫人の病氣危篤の報に接し六月廿六日に歸京したが夫人は其翌廿七日に歿し遺骨を菩提所に預けて三十日には再び出張の途に登り、九月廿七日に歸京して、十月静岡に赴き亡夫人の葬儀を營んだ。(閱歴書)。明治三十四年八月川島誠子と結婚、翌年二月離縁になり。三十九年四月駿河の人鈴木かね子を後妻に迎へた。(閱歴書)。明治三十二年二女治子土肥氏に嫁ぐ、同年長男の妻病死、三十八年四女咲子病死、四十年三女明子佐名木氏に嫁ぐ。大正四年三男不二雄川尻貞子と結婚五年四月分家、長男武に家督を譲りて隠居し三男の家に入る。(閱歴書)。朝鄰氏の歿後未亡人かね子は郷里に隱棲す(昭和九年一月廿九日歿)。

朝鄰氏は維新の際に主家中根氏の爲に不便を忍んで盡瘁したが、天性甚だ懇篤親切な人であつた従つて交友も甚だ多く、何時でもよく面倒を見たものであつた。維新前後に於ける和算家は多く朝鄰氏と交りのないものはなかつた。其の交友に就ても少し記るして見たいけれども煩を厭ひて之を省く。

爰に著述の目録を示めせば次の如きものがあつた。

淺致算法序。文久三年冬

算法淺述。文久四年正月自序

淺致算法解義。二冊。平野喜房撰、川北訂。元治元年以前
 精要算法解義。五卷。御粥安本解、川北訂。(同上)
 神壁算法解義。五卷。白石長忠解、御粥訂、川北再訂(同上)
 算學小鑿解義。二卷。川北潤色(同上)
 續算學小鑿解義。二冊。川北訂(同上)
 續神壁算法解義。五冊。白石及御粥。川北訂。文治元年九月
 算法淺問抄解義。三卷。御粥解、川北潤色。元治元年以前
 國府算額詳解。慶應元年
 算法開方通理。慶應元年
 算法圓内容八圓術。慶應二年
 所掲于東都芝愛宕山之算額。慶應三年。門人天野榮觀撰。川北訂及序
 淺致算法餘論。川北訂。慶應三年
 圓理手引求積解。三卷。内田五觀稿。川北補編。明治二年
 算法方圓鑑附錄橢圓題解。川北訂

筆算題叢。明治三年着手。明治六年卷四まで出版
 洋算發微。二卷。明治五年出版
 幾何學原礎。明治六年卷一。七年卷二、三。十一年卷六。十九年卷七、八出版
 同例題解式。五卷。明治十三年より十七年まで
 算法勾股通。明治八年卷一出版
 本朝數學家小傳。明治二十三年。佛人ベレタンに與へる爲に起草。後に増補したものもある。
 本朝數學家列傳。吉田光聞傳。明治二十四年
 數學會社雜誌。明治十一年より編輯に關係
 算學新誌。明治十一年初めより
 數學會社雜誌題解者一覽。小本一冊。明治十四年頃
 數理書院月報。明治十四年六月より十六年十二月、十九號まで發行
 數學協會雜誌。明治二十一年編纂
 此等の諸雜誌には川北氏寄稿のものも幾らも出てゐる。
 陸地測量之歴史。明治二十七年に着手。四十一年までに四十八冊

起稿

東京市史編纂上に關係。明治三十年

日本百科大辞典中本邦數學之部。明治三十七年擔當

三五會報。明治三十五年より編輯

圓理算要解義。五冊。萩原禎助遺稿。川北校正

算法方圓鑑解義。四冊。同上

算法圓理私論解義。四冊。同上

蠶管算法詳解。十一冊。同上

追遠發蒙解義。一冊。同上。明治四十四年序

湖山翁著圓錐形組合解。川北校訂。明治四十五年三月。

算法圓理三臺解義。川北校訂

此外に尙諸雜誌に起稿されたものや關先生記念講演集中の記事などがあるが、此等のものゝ目錄は更に調査して起述することとする。和算家の傳記に就て起稿されたものゝ多くあるかのやうに言はれてゐたが、今遺稿の見出されたものゝないのは遺憾である。川北氏の著述中で「數理起源」百

五卷が最も主要なものであるから、今此書に就て少し説明して置く、朝鄰氏は此書五十卷の成つたときに目錄一卷を作り、明治六年癸酉二月の年紀で序文を作り。

干、茲慶應丁卯ノ春好算岩田翁ノ橢圓解二條ヲ得テ始テ雜解集ヲ起シ 卷ヲ次コト十有五冊ニシテ翌戊辰ノ年モ亦五卷ヲ嗣グ。是ヨリ連年五卷或ハ十卷稿ヲ潤色シ壬申ニ至テ五十卷成ル依テ此目錄ヲ編ミ雜解集ヲ閱スルニ便ナラシム。

と言つてゐる。目錄に附した凡例は本書の成立を明かにするもので次の如く見える。

- 一、卷中多ク余ガ解ク所ノモノナリト雖モ、問亦糺々白石先生ノ解ヲ潤色ス。社盟算譜、温知算叢、算法雜俎ノ類是ナリ。其他都而他人ノ解ヲ潤色スルモノハ解末ニ明瞭ニ之ヲ附記ス。
- 一、算法奇賞ハ全卷ノ解ヲ載ス。錦江馬場先生ノ解ヲ潤色シ或ハ補フモノニシテ、算法淺問抄ハ御粥先生ノ閱ヲ得テ全卷ノ解ヲ載ス。
- 一、古今通覽卷五ノ解ハ坂部先生ノ解ヲ潤色シ又之ヲ補フト雖全備ナラス。第五十一卷ヨリ後之ヲ補フ。

- 一、拾瓊算法、精要算法、神壁算法、續神壁算法、算法稽古大全、演段品菜、算學小答、楷梯算法、不朽算法、五明算法、古今算鑑、豁機算法、算法瑚璉、算法圓理新臺、順天堂算譜

數理神編、算法方圓鑑等ノ問題ハ得ルニ從テ之ヲ載ス。

一、社堂掲額題ハ解末或ハ問題ノ始ニ其掲ル所ノ社寺撰者ノ名前ヲ載ス。

一、本編五冊一編トナシ、十編トス。……………通計五百六十三題、一千六百十九葉ナリ。又二

三問題ヲ載セシモノアリト雖モ解義ハ皆異ナリ。

一、精要算法、神壁算法、續神壁算法ノ三書ハ全卷ノ解別ニアリ依テ之ニ載セシハ別術カ或ハ非常簡易ノ解ナリ。

卷五十一以下も續いて編纂せられ、遂に百五卷の多きを成すに至つたが、矢張り前半部と同じやうな精神で作られたものであつた。さうして五十一卷より百卷までの五十卷に於ても目録一冊が作られてゐる。第五卷の成つたのは明治十三年九月十五日であつた。前記の著述目録を見ても矢張り解義類が多い。朝鄰氏は諸般の解義を集め、之を解し易く書き改め、依つて閲讀に便ならしめることが最も得意であり、又其學者としての生命であつた。

川北朝鄰先生を懷ふ

小倉金之助

川北朝鄰先生の二十三年忌に當り、遺族の方から、先生の傳記に寄せる言葉を求められた。しかし和算家としての先生については、先輩の方々が語られるであらうから、私はこゝに他の一面、即ち西洋數學普及家としての先生の業績を、回想することに止めたいと思ふ。

和算家として立たれた先生は、明治の革新に接して、洋算を學ばれることになつた。明治五年には、早くも「洋算發微」の刊行を見るのである。それは一次不定方程式のみを取扱つた著述であり當時の代數書の水準を抜いたものであつた。

明治八年には、山本正至と共に、「幾何學原礎」を譯された。それはアメリカ人クラークが静岡の學校で口授したユークリッドの翻譯であるが、その頃までに行はれた幾何學書——それ等は、云はゞルジャンドル型であつた——に反し、あの困難な比例論によるユークリッドなのである。例へば、先生等は比例の定義を、

「若四數有て、其第一と、第三の數を、何にても或等倍數（等倍數は、即等數を乘じたる積をいふ。……）となし、又第二と第四の數をも、何にても或等倍數となし、而して第一の倍數は、第二の倍數より大なるか、夫と等き歟、或は夫より小なるかに準じて、第三の倍數も亦第四の倍數より大なるか、夫と等き歟、或は夫より小なる歟なる時は、第一と、第二に持割合と、同じ割合を、第三と、第四に持者なり。互に同じ割合を持所の、諸數を指して、比例といふ。」

と述べてゐる。かう云つた嚴密な譯文が、當時の日本に於てどんなに困難であつたかは、想像するに餘りある。

明治十三年には、イギリスのドリュエーの「圓錐截斷曲線法」卷一（拋物線）が譯されたが、これは單行本として出版された、いはゆる高等數學書の最も初期のもの、一であつた。

その頃、先生は東京數學會社に於て活動され、また後に明治二十年からは、數學協會を創立して活躍されるに至つたが、私の何よりも注意を拂ひたいのは、數學書の系統的な翻譯出版事業である。それは最初は上野清の協力によつたが、間もなく長澤龜之助との協力に代つて、數理書院は立てられた。數理書院からは、

トドハンター	(上野 清譯)	軸式圓錐曲線法	十四年七月
"	(長澤龜之助譯)	微分學	十四年十一月
"	"	積分學	十五年四月
ドリュエー	"	幾何圓錐曲線法	十五年八月
トドハンター	"	代數學	十六年一月
"	"	平面三角法	十六年六月
"	"	球面三角法	十六年八月
"	"	宥克立 <small>(ユック)</small>	十七年一月
"	"	論理方程式 <small>(代數方程式論)</small>	十七年七月
ブール	"	微分方程式	十八年一月

等々が刊行され、更に長澤の外に、向井嘉一郎、市東佐四郎等の解式書も現はれた。そして、これ等の刊行物は、全部、先生の校閲にかゝるものだったのである。

短日月の間に遂行された此等の翻譯を、今日の眼から見て、色々と批判を加へることは、もとより容易である。しかしながら私達は、何よりも先づ、當時は譯語の未だ統一されない時代であり、

更に學界の水準の低かつた時代なることを、銘記しなければならぬ。試みに、當時の日本が持つ最高の數學研究機關「東京數學會社雜誌」第十六號（明治十二年六月號）の一節を引かう。

「左の五題はトードホントル氏「コニツク、セクシヨシ」より抜出したるものなり。連直線式（三線座標のことである）の性質及び文字の用法は此書に就て學びたる輩に非れば解し易しとせず。近世泰西の算家此法を研究するもの少からずと云ふ。……」

——かやうな歎きは、先生の翻譯事業によつて、一應解消されたに相違ないのである。

勿論、かやうな専門數學書の出版も、他に全然ないわけではなかつた。現に、攻玉舎關係からは田中矢徳等々の一聯の數學書を刊行してゐるし、また文部省でも

山本信實編「代數幾何學」（明治十五年）

チャーチ氏「微分積分學」（岡本則録増譯）（明治十六年）

を發行してゐる。しかし此等の出版は、その規模の廣大さと程度の高級さに於て、遙かに先生の事業に劣ると云つてよいだらう。

實に先生によつて選ばれた譯書の程度は、當時の東京大學——わが最高學府に於ける（少くとも

その中學年の）純粹數學の講義と、大差あるものではなかつた。この事實は、私達の今日明かに實證し得るところである。プールの「微分方程式」が、あの時代に完譯されたことなどは、むしろ奇蹟的であつたと思はれる。

先生は「軸式圓錐曲線法」の最後に述べてゐる。——

「……維新の改革も既に已に十有餘年の星霜を経、世の文化駁々歲月と共に進歩するに従ひ、著譯書愈々其數を増し、今年に至つては、彼我折衷拔萃抄譯等の書は、算數代數より幾何三角に至る迄相重複し、其書冊汗牛も當ならず。且つ加之我東京に數學會社擴張會等の設けあつて斯道を講究擴張す。朝鄰亦兩會の員にあり、同學諸氏と彼此交通亦大に得る所あり。然れども眼を轉じて各地方の形況を觀察するに、其懸隔幼稚の成人に於けるが如し。是に於て其何が故に果して然るやを討究するに、是れ全く斯學を修むる者の尠きに由るにあらず、又教則の完備せざるに由るにあらず、要するに唯完全なる數理書の刊行せるものなきに由るのみ。……」

今日世に缺乏して學者の必要とする所の書は則ち高等の書なり。……廣く字内の數理を求め之を全國の學士に示し、異日果して能く歐米に凌駕せば、朝鄰亦興りて勞ありと謂つべし。今日の微勞の如きは豈敢て之を辞せん、豈敢て之を辞せん。……」（明治十四年六月）

東京
 荒川重平 菊池大麓 長谷川陽一 笹間知之 伊藤雋吉 大森鐘一 山内長人 藤澤利喜太郎 押上森藏 平山成信 藤井包總 岸田稔 關田大之 山本債實

東京
 伊藤直溫 山本耕夫 餘語久胤 菊池敏吉郎 菊池武男 行方五市 吉田喜重郎 吉見忠次郎 人見守一 矢島守一 杉山正治 山田行彦 酒田捨夫 林出若吉 岡本則錄

東京
 奈佐榮 宮川榮 中村榮藏 長澤龜之助 齋藤精輔 芦田伊人 中村清二 三上義夫 高木貞治 高野長行 吉村義行 山口久吉 山田盛作 古田盛作 中島權

附

○故人ト親交アリシ方々ノ芳名

(敬稱略順不同)「生前翁ノ日記ヨリ」

思へば、先生は、其の翻譯に於て其の經營に於て、實に異常な困苦艱難を冒して、この大業を實踐された人士であつた。

今日昭和の革新に際し、わが國民科學向上の問題が、盛に論議されつゝあるの時、私はわれ／＼の輝ける先驅者、川北朝鄰先生を懷ふの念の切なるものがある。

(昭和十六年一月六日)

東京	古田利三郎	神奈川	秋山修一郎	靜岡	鈴木世親
"	山田又市	"	比留川仁良	"	土井義足
"	赤松範一	千葉	藤田誠兵衛	"	土肥七之助
"	岩永義晴	"	市東佐四郎	"	早川久之丈
"	吉川宗光	"	高關八百千郎	"	黒田六三郎
"	伊藤祐中	大阪	和久正辰	"	石黒準太郎
"	山本菊次郎	"	小倉金之助	"	川尻太郎松
"	山中笑	靜岡	河守三郎	"	荒木康成
"	鈴木茂松	"	田村福太郎	"	小柴直矩
"	野坂喜代松	"	吉見義資	"	吉田兵次郎
"	日比野正之	"	大石善一	"	久世麗太郎
"	吉田林太郎	"	大橋善一	"	齋藤庄三郎
"	中村丈吉	"	杉原正市	"	田代庄三郎
"	長谷川鑑一	"	若月英作	"	勢山榮三
"	梅津武雄	"	稻葉鑛之助	"	下山忠造
"	新井清吉	"	鈴木茂富	"	藤川春龍
"	村上唯一	"	鈴木猪之作	"	眞野文二
神奈川	秋山保	靜岡	鈴木猪之作	群馬	萩原要

寫

甲第八八號

○資料ノ蒐集ニ就テ

拜啓先日三上義夫出張ノ節ハ種々御懇情ニ預リ深謝仕候御先考朝鄰翁傳記並ニ一般ニ和算ニ就テ十分ニ調査致度候ニ付此ノ上共資料等御提借相願度就テハ朝鄰翁日記類及旅行紀等暫時借用仕度候間御手数ノ段恐縮ニ候ヘ共一應御送附被成下度此段御禮旁々御依頼候也

大正十年七月六日

帝國學士院長 男爵 穂積 陳 重

寫

川北不二雄殿

甲第八九號

拜啓本院ニ於テ多年來和算史調査中ニ候處故川北朝鄰翁傳記ニ就テモ取調仕度候ニ付右資

料並ニ御遺藏ノ算書類等本院へ御提供相願度御依頼迄如斯ニ候也
大正十年七月六日

帝國學士院長 男爵 穗積 陳重 印

川北カネ子殿

○遺墨、圖書ノ寄贈

寫

一、和 算 書 三十五冊

別紙目錄之通

右 御 寄 贈 相 成 御 厚 志 深 謝 致 候
永 夕 保 存 本 院 ノ 資 料 ニ 可 供 候 也

昭和六年六月二十四日

帝國學士院長 櫻井 錠二 印

川北不二雄殿

寫

○寄贈圖書目錄

圓理算要解義(火木土金水) 上毛 萩原禎助遺稿 駿河 川北朝鄰校正

算法方圓鑿解義(元亨利貞) " " " 四冊

算法圓理私論解義(白黃青黑赤) " " " 五冊

本朝數學史料艸稿 川北朝鄰蒐輯 " 二冊

三五會々報(自第一號至第七十二號)卷一—七 山口久喜編 刊本七冊

成田山額面內編 長谷川傳治良規一撰 寫本一冊

角之卷 貢湖先生編 " 一冊

尖圓豁通詳解 杉田久明述 " 一冊

算法圓理稱平術拾遺 川北彌十郎朝鄰編 天野文次郎榮親訂 " 一冊

圓理稱平術拾遺 川北彌十郎朝鄰編 天野文次郎榮親訂 " 一冊

大日本帝國測地事業沿革ノ大略 川北朝鄰有項撰額 " 一冊

立算堂揭額駿河編 " 一冊

和算家芳名錄

方塚術解義

無表題

有三一先生

算法額面解

合計拾七部三拾五冊

御粥安本君修編

御粥先生閱 平野喜芳撰 川北朝鄰訂

” ” ” ” ”
一冊 一冊 一冊 一冊 一冊

昭和十六年三月十五日印刷
昭和十六年三月二十日發行

非賣品

東京市世田ヶ谷區松原町一ノ一、七七九

發行者 佐名木和三郎

神奈川県横須賀市中里町一

印刷人 山崎角藏

神奈川県横須賀市中里町一

印刷所 港榮社印刷所

410
421

終

